St. Luke's International University Repository

聖路加看護大学21世紀COEプログラム第7回国際駅伝シンポジウム報告　子どもと学ぼう、からだのしくみ -
あなたはどれくらいからだを知っていますか？ -
～駅伝シンポジウムにみるPeople-centered Careの発展過程～

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐居, 由美, 松谷, 美和子, 山崎, 好美, 中山, 久子, 大久保, 暢子, 石本, 亜希子, 三森, 寧子, 多田, 敦子, 印東, 桂子, 瀬戸山, 陽子, 村松, 純子, 小山, 敦子, 岩辺, 京子, 森, 明子, 有森, 直子, 今井, 敏子, 原, 瑞恵, 菱沼, 典子, Sakyo, Yumi, Matsutani, Miwako, Yamazaki, Yoshimi, Nakayama, Hisako, Okubo, Nobuko, Ishimoto, Akiko, Mitsumori, Neiko, Tada, Atsuko, Indo, Keiko, Setoyama, Yoko, Muramatsu, Junko, Koyama, Atsuko, Iwabe, Kyoko, Mori, Akiko, Arimori, Naoko, Imai, Toshiko, Hara, Mizue, Hishinuma, Noriko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00014996

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

―― 資 料 ――

聖路加看護大学21世紀COEプログラム第7回国際駅伝シンポジウム　報告

子どもと学ぼう，からだのしくみ
―あなたはどれくらいからだを知っていますか？―
～駅伝シンポジウムにみるPeople-centered Careの発展過程～

佐居由美[1)]，松谷美和子[1)]，山崎好美[1)]，中山久子[1)]
大久保暢子[1)]，石本亜希子[1)]，三森寧子[2)]，多田敦子[2)]
印東桂子[2)]，瀬戸山陽子[3)]，村松純子[4)]，小山敦子[5)]
岩辺京子[6)]，森明子[1)]，有森直子[1)]，今井敏子[7)]
原瑞恵[8)]，菱沼典子[1)]

抄　録

本稿は，聖路加看護大学21世紀COEプログラムの一環である『第7回COE国際駅伝シンポジウム「子どもと学ぼう，からだのしくみ」』の概要を記述し，その運営実施過程を分析評価することにより，People-centered Careの構成要素について考察することを目的とする。

第7回駅伝シンポジウムは，5歳児がからだを学べる方法を提示し一般市民と有意義な意見交換を行うことを目的とし，5歳児と両親，保育士や幼稚園教諭，看護師・養護教諭など5歳児にかかわる専門家を対象として開催された。

シンポジウムの企画運営は市民との協働で行われた。シンポジウムは，①子どもが「からだを学ぶ」ための教材としてのテーマソング「からだ　フ・シ・ギ」の歌と踊り，②人間の消化機能を解説した紙芝居「リンゴがウンチになるまで」の上演，③子どもとからだのしくみを学ぶことについてのシンポジウム「子どもと学ぼう，からだのしくみ」から構成された。プログラムは，1プログラム20分以内とし，紙芝居・歌・踊りなどを取り入れ，子どもが飽きない工夫を行った。

シンポジウムの運営実施における市民との協働過程においては，これまでのCOE活動から得られたPeople-centered Careの要素〔役立つ健康情報の生成〕〔異なる視線でのつながり〕等が確認され，「コミュニティに潜伏しているニードを湧きあがらせ（互いに確認し）顕在化させ，活動を専門家との協働へと移行し発展させる」過程を経験し，新たに〔互いに確認する過程〕という要素を見いだした。

また，駅伝シンポジウムにおいて，当初，模索されていた市民との協働（2004年）が，湧きあがったコミュニティとの協働（2005年）へと視点を移し，さらに，協働が進行しているコミュニティと専門家が活動のさらなる展開を共に模索するシンポジウム（2006年）へと，市民との協働のプロセスが発展していることが確認された。コミュニティとのさらなる協働のあり様，「5歳児がからだを学べる方法」の具体的評価方法，などが，今後の課題として再確認された。

キーワード：市民主導，コミュニティ，協働，教材開発，21世紀COEプログラム

Ⅰ．はじめに

聖路加看護大学では，2003年度より，文部科学省の研究助成金を受け，21世紀COEプログラム（国際的研究拠点）に取り組んでいる。本プログラムは，「市民主導型健康生成」を目指し，People-centered Careをその

受付日2007年2月1日　受理日2007年4月27日
1）聖路加看護大学，2）聖路加看護大学大学院修士課程，3）東京大学大学院医学系研究科健康社会学，4）Baby in Me
5）㈱episode，6）聖路加看護大学非常勤講師学校保健，7）東洋英和女学院小学部養護教諭，8）聖路加国際病院

主要概念として，様々な活動を展開している。私たち一人ひとりが，それぞれの経験や知恵に基づいて，自分にとっての最善の医療を納得して選択できるようになること，健康資源を活用して自らの健康を生成することが，本プログラムの目的であり，このような新しいかたちの健康作り活動を，People-centered Care と称している。これらの活動の一環として，市民と医療者が共に集う連続したシンポジウム（駅伝シンポジウム）が企画され，継続的に開催されている（表１）。これらの駅伝シンポジウムは報告，分析評価され，People-centered Care 生成に必要な要素・構成概念について検討が重ねられてきた（小松他，2005；有森他，2005；小松他，2006；江藤他，2006；川上，2007）。

本稿では，2006年度に開催された第７回駅伝シンポジウム（「日常生活援助のための看護技術」プロジェクト主催）の概要を記述し，その運営実施過程を分析評価することにより，People-centered Care の構成要素について考察することを目的とする。市民と共に歩んできたCOE駅伝シンポジウムにおける People-centered Care の構成要素をその発展過程を含め，これまでのシンポジウムで得られた結果を踏まえ考察することで，People-centered Care における今後の課題・方向性への示唆が得られるものと考える。

Ⅱ．People-centered　Care の構成要素

本学のCOEが，その主要概念としている People-centered Care の文献検討による概念分析においては，（山田，2004）その先行要件として，①健康や社会に関連した問題であること，②ケア提供者と消費者の役割変化，属性として，①人々が主体であること，②健康増進を目標としていること，③コミュニティとの協働，を挙げ，帰結は，①エンパワーメントの高まりと，コミュニティにもたらされる利益を含むコミュニティの発展，②ヘルスケアの向上・健康増進，であると指摘している。これまでの駅伝シンポジウムの分析評価においては，People-centered Care にとって重要な共通要素として，〔おもいやり〕〔生きてきた経験からの学び〕〔わかりあう言葉〕〔役立つ健康情報の生成〕〔異なる視線でのつながり〕〔意思決定〕が指摘され（小松，2005），確認されている（江藤，2006）。また，今回の駅伝シンポジウムを主催する「日常生活援助のための看護技術」プロジェクトでは，研究進行の形態において，「専門家主導」から「コミュニティと協働する」研究に変貌した経験をもち，研究過程においては，People-centered Care の先行要件である「健康や社会に関連した問題であること」「ケア提供者と消費者の役割の変化」の２つを認め，当初より明確であった「健康増進を目標としていること」に加え，「コミュニティとの協働」が進行中である（菱沼，2006）。本シンポジウムも，これらのCOEの活動を踏まえて開催された。

表１　聖路加看護大学21世紀COE国際駅伝シンポジウム

第１回（2004.7.17）	：「家で死ねるまちづくり」
第２回（2004.10.3）	：「考えよう！医療と看護―あなたも医療チームの一員―」
第３回（2004.11.21）	：「自分で決めた生き方を実践するために」
第４回・第５回共通テーマ『支えあい，分かちあい，健やかに生きる』	
第４回（2005.10.29）	：「私たちが選ぶ時代に向けて：患者中心の乳がんチーム医療」
第５回（2005.11.27）	：「知恵と勇気と経験で分かちあう：社会の中で支えあう女性たち」
第６回・第７回共通テーマ『世代を超えた地域ネットワークの構築をめざして』	
第６回（2006.9.30）	：「『認知症になっても安心して暮らせる街づくり』―できることから始めよう！都市部における認知症介護―」
第７回（2006.10.28）	：「『子どもと学ぼう，からだのしくみ』あなたはどれくらいからだを知っていますか？」

Ⅲ．第７回駅伝シンポジウムの概要

１．シンポジウムの目的

第７回駅伝シンポジウムは，幼児（５歳児）がからだを学べる方法を提示し，一般市民の方と有意義な意見交換を行うことを目的とした。これは，健康情報の基本である「体の知識」を市民がもつことが，保健行動における市民の主体性と医療における患者の主体性を支えるために必要（菱沼，2006）であるという考えに基づくものであり，５歳児と両親、保育士や幼稚園教諭，看護師・養護教諭など５歳児にかかわる専門家を主な対象とした。

本シンポジウムは，聖路加看護大学21世紀COEプログラムにおける「日常生活援助のための看護技術」プロジェクト（研究代表者：菱沼典子，通称　COE11）が中心となり，企画運営を行った。このプロジェクト（以下、本プロジェクト）では，2003年度より，５歳児向けの「自分のからだを知ろう」プログラム製作に取り組んでおり，５歳児を対象にからだのしくみについて学べるプログラムを作製し，絵本・紙芝居・臓器Ｔシャツなどの教材開発を試みている。なお，養護教諭へのグループインタビューおよび先駆例の調査から，対象を就学前の５歳児としている（菱沼，2006）。開発した教材は，順次，幼稚園・保育園における幼稚園教諭・保育士・保護者による実演を経て，評価修正を行っている（松谷，2007）。本プロジェクトでは，第７回駅伝シンポジウムにおける具体的目的を，①開発した教材を市民に公開し，評価を得る，②「自分のからだを知ろう」プログラムの

表2　第7回駅伝シンポジウム　プログラム

[受付]キルト記入　書く

[導入]あなたはどれくらいからだを知っていますか？

からだの白地図への消化器臓器の記入　書く

[教育プログラム実演]「リンゴがうんちになるまで」紙芝居実演

東洋英和幼稚園　平田智子・小林千恵　聞く　見る

[テーマソング披露]歌と踊り：テーマソング「からだ　フ・シ・ギ」　音を感じる

[シンポジウム]テーマ「子どもと学ぼう，からだのしくみ」司会：菱沼典子（聖路加看護大学）

<シンポジスト>

1．親の立場から　～子どもとからだのしくみを学ぶことについて～

高松朱美氏（中央区在住3児の母）

2．保育専門家の立場から　～子どもとからだのしくみを学ぶ立場から～

高橋和代氏（中央区明石幼稚園教諭）

3．子どもとからだのしくみを学ぶための社会づくりへの市民の役割について

ノエル・クリスマン氏（文化人類学者・米国ワシントン大学看護学部教授）

※シンポジウム中，子どもは子どもルームへ。　遊ぶ

[子どもによる歌と踊り]テーマソング「からだ　フ・シ・ギ」の歌と踊りの披露　歌う　踊る

[終わりの挨拶]小松浩子（聖路加看護大学21世紀COEプログラム拠点リーダー）

注：□内は，プログラムに組み込まれた子どもへの刺激の種類。子どもが，キルト用布に自分の手の型をかたどりサインを書き，からだの白地図に消化器臓器を書き，紙芝居の実演を見て聞いて，テーマソングで音を感じ，シンポジウム中子どもルームで遊び，テーマソングを歌って踊る，というプログラムとすることで，子どもがシンポジウムに飽きずに参加できることを意図した。

新たな実践施設の確保，③幼少時よりからだの知識を学ぶことの必要性についての市民の反応を知る，の3点とし，シンポジウムの企画に取り組んだ。

2．シンポジウムの企画

シンポジウムの企画にあたっては，医療者主導でない真の市民主導である（People-centered Care）シンポジウムを目指し，これまでの駅伝シンポジウムの評価分析結果（有森，2005）を参考に，①メインテーマの確認，②「市民を巻き込む」方略の模索，③市民に対してわかりやすく説明する努力，④People-centered Careとシンポジウムの目標の再検討，⑤医療者が市民から「教わる」姿勢，の5点に，特に留意した。

本シンポジウムを主催する本研究プロジェクトは，当初，本学教員の発案で開始されたが，本テーマに関心のある学外メンバー（保健師，養護教諭，一般社会人など）との協働過程において，自らの健康生成のためにはからだの知識が必要だという認識が一致した経験をもつ。養護教諭への聞き取り調査を経て対象コミュニティを5歳児と5歳児を取り巻く保育園・幼稚園，保護者と決定したあとは，前述したように，そのコミュニティと本研究のニードが合致し，研究者主導で開始された研究がコミュニティと協働する研究に変貌するという研究プロセスを経ている（菱沼，2006）。第7回駅伝シンポジウムの企画は，すでに、コミュニティと専門家が協働しているプロジェクトの既存のメンバーに加え，シンポジウムの意図に賛同した新たなメンバー（幼稚園教諭，中央区青少年委員，イベント会社勤務の元看護師）が加わり2005年12月より，プロジェクト活動と並行して開始された。

企画の段階では，当初から，「市民を巻き込む」ため，聖路加看護大学が位置する中央区の幼稚園・保育園への働きかけを行った。近隣の幼稚園および区の保育園担当者にシンポジウムの意図を説明し，中央区内の幼稚園・保育園への広報の協力を得た。演者・シンポジストは，「自分のからだを知ろう」プロジェクトの協力者であり，本シンポジウムの意図を理解している中央区民に紹介を依頼し決定した。

また，シンポジウムの対象である5歳児に「わかりやすく説明する」ことを目指し，子ども以外の参加者にも配慮し，コミュニティの特徴を踏まえ企画にあたっては，以下の工夫を行った。

〔体感参加型プログラム〕子どもの集中力の持続性に配慮し，1プログラム20分を限度とした。子どもが効果的に学べるために，「書く」「聞く」「見る」「音を感じる」「遊ぶ」「歌う」「踊る」が体感できる参加型プログラム（表2）とした。そのため，テーマソング「からだ　フ・シ・ギ」を作詞作曲（表3）し，歌に合わせてメンバーである幼稚園教諭が振り付けを作成した。また，参加した子どもたちが自分の手の型をとり，サインをしたキルトで，駅伝シンポジウム恒例のシンボルキルトが企画された。

〔楽しく安全な会場設営〕メイン会場である講堂の椅子を撤去し，子どもが自由に移動できる広いスペースを確保した。子どもの保護者を含む大人がシンポジウムに集中して参加するために，託児室（子どもルーム），授乳室，バギー置場を設置した。会場には，風船や「からだのしくみ」絵本のイラスト，折り紙などをかざり，参加した子どもが「楽しい」と感じられるような会場設営を行っ

表3　テーマソング「からだ　フ・シ・ギ」

♪「からだ　フ・シ・ギ」♪

作詞：村松純子＋COE11

たべたごはんは，どこいくの
どうしてよるは　ねむたくなるの
ウンチってなぁに　アクビってなぁに
からだ　ふしぎだね

くしゃみのはやさは　しんかんせん
すいかたべたら　おしっこたくさん
はたらいているの　ねているときも
からだ　ありがとう

どうしてわたし　おおきくなるの
どうしてしんぞう　ドキドキするの
ほねってなぁに　ちってなぁに　イエイ

からだ　たから　だから　からだ
もっとしりたい　しりたいな

からだ　たから　だから　からだ
もっとしりたい　しりたいな　からだ！

た。また，子どもの安全に配慮し，会場の収容人数（約400名）を下回る200名を定員とした。

〔一体感の演出〕主催者と参加者とのシンポジウムにおける一体感（協働への足がかり）を演出するため，プロジェクトのシンボルマーク（図1）を作成した。シンボルマークは会場内に掲示し，運営スタッフはシンボルマークをプリントしたTシャツを着用した。会場の演出方法，プログラム進行においては，イベント会社勤務のメンバーの意見が多用された。

〔イラストを多用した配布物〕広報用チラシ・リーフレットは，わかりやすく，見た目にも楽しめるように，イラストを多用し大きめの文字フォントを用いた。イラスト（シンボルマーク）を印刷した持ち帰り用手提げ袋の作製も行った。

また，企画の検討段階では，常に，「本シンポジウムのメインテーマ」と目的，People-centered Careを目指すプロジェクトの一環としてのシンポジウムにおける具体的目標の検討・再確認を行い，プロジェクト内における意志統一をはかった。幼稚園教諭・母親・青少年担当者等の様々な立場のメンバー一人ひとりの意見を尊重し，「医療者が市民から「教わる」姿勢」を心がけた。

また，作成した絵本の評価を得るため，参加者には，「からだのしくみ」についての絵本『わたしのからだ』6冊（図2）をアンケートハガキと共に配布した（「からだのしくみ」は全8冊のシリーズで企画，「生殖器系」「解説本：保護者の方へ」の2冊は作成予定）。

シンポジウムの広報活動としては，前述した中央区の

図1　シンボルマーク（瀬戸山陽子作）

図2　絵本「わたしのからだ」

全幼稚園保育園，中央区周辺の区の幼稚園保育園へのチラシの送付，21世紀COEプログラムによるホームページ「看護ネット」への掲載等を行い，インターネット・ファックスにより申し込みを受け付けた。広報用チラシには，「シンポジウムの内容・会場の様子は報告広報用に記録撮影され，得られた内容は個人が特定されない形式で公表される」旨，記載し，参加者には了承のうえ申し込みいただくこととした。また，参加申し込み者に郵送した「参加登録証」，当日配布のパンフレットにも，「シンポジウムの内容・会場の様子は報告広報用に記録撮影される」旨記載した。

また，聖路加看護大学21世紀COEプログラム作成の子どものためのＨＰ「看護ネットfor KIDS」http://www.kango-net.jp/kids/index.html　の上映が会場で行われることとなり，配布用「看護ネットfor KIDS」シールが製作された。

3．駅伝シンポジウムの内容

2006年10月28日（土），本シンポジウムは，196名（うち，子ども75名）の参加者とスタッフ47名と合わせ，総勢243名にて開催された。参加した子どもは，年齢0～11歳（平均4.87歳），男児33名，女児42名であった。

シンポジウムでは，参加者は，まずからだの輪郭をか

たどった「からだの白地図」に，食道・胃・腸などの消化器臓器の記入を行った。この白地図記入は，参加者が「からだのしくみを学ぶ」ための導入を意図した。参加者による臓器の記入が終ったあと，その解答を兼ね，本プロジェクト作成の紙芝居「リンゴがうんちになるまで」が，東洋英和幼稚園の平田・小林両教諭によって上演された（図３）。両教諭は，試演の段階での本紙芝居の実践の経験があるため演者として依頼した。子どもを含む参加者は，熱心に紙芝居の上演に見入っていた。次に，本シンポジウムのために創作されたテーマソング「からだ　フ・シ・ギ」に合わせ，聖路加看護大学の学生ボランティアによる踊りが披露された。講堂の壇上と階段での学生ボランティアによる楽しいリズムに乗った踊りに会場は魅了されていた。

休憩をはさみ，子どもは「子どもルーム（託児室）」に移動し，シンポジウムが開催された。「子どもルーム」は，幼稚園教諭，小児病棟看護師・養護教諭経験者の本学大学院生，看護学生ボランティアによって担当された。

シンポジウムでは，それぞれ異なった立場の３人のシンポジストをむかえた。子どもとからだのしくみを学ぶことについて親の立場から，高松朱美氏（中央区民３児の母）は，子どもがからだのしくみを学ぶことの重要性について述べた。子どもが病気になり自分のからだに興味をもち，親と共にからだのしくみを学ぶ，その繰り返しで子どもは自分のからだのことを学んでいると，自らの経験を交えて語った。その中で，「子どもがからだのしくみ」を学ぶための教材の必要性に触れ，特に子どもがイメージし難いからだの内部の理解において活用できると指摘した。

次に，保育専門家の立場から高橋和代氏（中央区立明石幼稚園教諭）は，子どもが健康な心やからだを作っていくための幼稚園教諭の役割について語った。日々の生活のなかに，「自分のからだを自分が知っていく」ための簡単な遊びを取り入れるなどの幼稚園における実践について述べ，それらの積み重ねで子どもが自分のことを自分の言葉で伝えられるようになっていく，とのことであった。子どもが健康になっていくために必要な知識を，子どもの発達段階に合わせた方法で，毎日の生活の中で繰り返し伝えていると語った。そのためには，「からだのしくみ」について，きちんとした言葉で正しい情報をいつでも子どもに伝えることができる教材は有用であると話した。

図３　紙芝居の上演

最後に，子どもとからだのしくみを学ぶための社会づくりへの市民の役割について，文化人類学者のノエル・クリスマン氏（ワシントン大学）は，子ども（7～11歳）が健康について知っていることの30％は学校で，30％は家庭で，30％はコミュニティで学んでいた，という米国の研究を紹介し，子どもたち次世代の健康を作るために重要なのは親であり，親が主体となり，自らのニーズを伝え，学校の教師や専門家と協働して活動を行うことの有効性について，米国における慢性疾患予防のグループの例などを交え語った。

シンポジウム後のディスカッションでは，在日外国人家族と健康を考える小さなグループ活動を行っている参加者から，その活動を発展させていくための方策についての質問や，生殖器に関する絵本作成を希望する発言があった。市民の中に，既に自らの健康を自ら守ろうとしているグループが存在していること，「からだのしくみ」を学ぶための教材の需要があることがわかり，本シンポジウムの目的の妥当性を再確認することができた。

シンポジウム終了後，子どもたちが子どもルームからメイン会場である講堂に入場し，テーマソング「からだ　フ・シ・ギ」に合わせた子どもたちによる踊りが元気いっぱいに披露された。どの子も，本日聞いたばかりの歌に合わせ楽しそうに踊っており，教材としての「歌」の有効性を実感することとなった。

その後，駅伝シンポジウム恒例の東京キルトリーダーズによる，子どもたちの手形のシンボルキルト（図４）が披露され，子どもたち一人ひとりのサインの入った大小様々なキルトにより完成した素敵なキルトに，参加者から感嘆の声があがっていた。最後に小松浩子 COE プログラム拠点リーダーによる子どもに配慮したわかりすい言葉による「閉会の挨拶」をもって，第７回駅伝シンポジウムは全プログラムを終了した。

終了後には，「テーマソング　からだ　フ・シ・ギのＣＤは借りられるのか？」「紙芝居を園でも上映したい」「“わたしのからだ”絵本を，コピーしたい」などといった，紹介した教材について，幼稚園保育園関係者からの問い合わせが数件あった。

Ⅳ．シンポジウムの評価

参加者には，本シンポジウムの評価を得るため，アンケート用紙を参加者（子どもを除く）に配布し，73枚が回収された（回収率60.3％）。以下にその一部を述べる（各項目の有効回答のみ集計）。

1．対象者の属性（表4）

参加者は，30～40歳代の女性が大部分を占め，職業の内訳では，主婦23名，看護職（看護師・保健師）19名であり，主婦の参加が多かった。

2．シンポジウムの内容について（図5）

シンポジウムの内容については，5段階のリッカートスケール（5：とてもよかった～1：まったくよくなかった）にて記入を求めたところ，「5．とてもよかった」「4．よかった」が大部分を占め，特に，「踊り」「歌」「紙芝居」は，回答者の約9割が「とてもよかった」または「よかった」と回答していた。各項目の平均値と標準偏差は，紙芝居4.5(±0.66)，歌4.5(±0.7)，踊り4.4(±0.7)，シンポジウム4.1(±0.8)，であった。

3．子どもがからだのしくみを学ぶことについて

子どもがからだを学ぶことについては，回答者全員（71名）が，「賛成」であった。

4．子どもがからだについて学ぶための取り組みについて（表5）

参加者に，日常生活の中で，子どもがからだについて学ぶために，どのような取り組みを行っているか，について問うたところ，「子どもと一緒にからだのお話を聞く」「家族で一緒に絵本を読む」「園で子供たちに教えたい」「子どもが学んできたことを話すのを聞く」の順に回答が多かった。

5．自由記述

自由記述欄では，シンポジウム全体について，「親子で学ぶよい雰囲気で，子どもも楽しくからだに興味をもった」「からだのしくみを教えるきっかけとなった」など，シンポジウムが，子どもがからだを学ぶ機会になったこと，「からだのしくみのすばらしさを知ることで生命の大切さを改めて感じた」「子どもたちにとって，一人ひとりのからだがとても大切であることを知るきっかけとなった」「子どもがからだを大切にするよい体験であった」など，からだのしくみを知ることがからだを大切にするきっかけとなりえること，「からだについて親子が一緒に考えていくことを通して，お互いが学ぶコミュニケーション技術が大切」という親子のコミュニケーションに言及した記述がみられた。

シンポジウム内の各プログラムについては，「シンポジウム」について「クリスマン氏の提案に他のシンポジストのお2人が，どのような可能性があると考えられたか知りたかった」「内容がもう少し充実していてもよかった」「細かくステップを踏んだ講義的なものを伺いたかった」「テーマがつかみにくかった」などの意見があった。

「紙芝居」等教材に関しては，「脳と心の健康について含めてはどうか」「からだを知るだけでなく，こうしたらもっと元気になれる，大きくなれるという内容を含んではどうか」「内容はよいが，わかりやすい説明を入れてほしい」との提案・要望がみられた。また，「歌」と「踊り」については，「からだについて興味をもちやすいテンポとメロディーラインであった」「子どもが覚えやすく踊

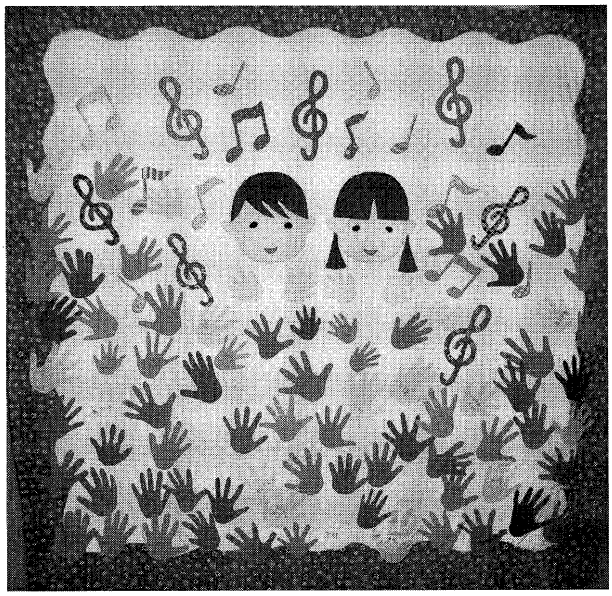

図4　シンボルキルト

表4　対象者の属性（N=73）

		N	（％）
年齢	10代	0	（0）
	20代	5	（6.8）
	30代	34	（46.6）
	40代	23	（31.5）
	50代	7	（9.6）
	60代	2	（2.7）
	70代以上	1	（1.4）
性別	男性	8	（11.0）
	女性	64	（87.7）
職業	会社員	9	（12.3）
	主婦	23	（31.5）
	保育士	8	（11.0）
	幼稚園教諭	5	（6.8）
	看護師	15	（20.5）
	保健師	4	（5.5）
	助産師	0	（0）
	養護教諭	1	（1.4）
	その他	7	（9.6）
記入者の子どもの人数	1人	16	（21.9）
	2人	26	（35.6）
	3人	8	（11.0）
	記載なし	23	（31.5）
記入者の立場	父親	7	（9.6）
	母親	41	（56.2）
	祖父	2	（2.7）
	祖母	2	（2.7）
	その他	7	（9.6）

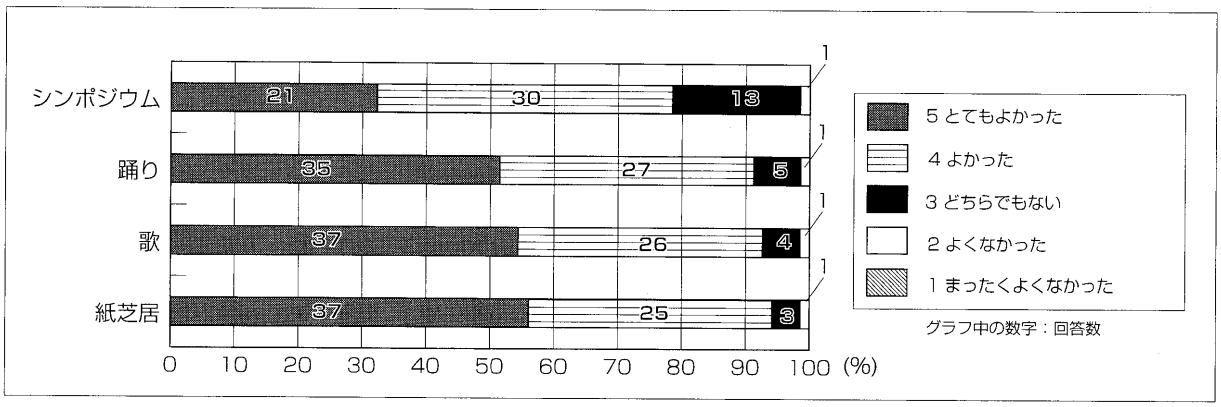

図5　プログラムの評価

表5　子どもがからだのことを学ぶための取り組みについて (N=73)

	N (%)
子どもと一緒にからだのお話を聞く	38 (52.1)
家族で一緒に絵本を読む	35 (47.9)
子どもが学んできたことを話すのを聞く	22 (30.1)
園で子どもたちに教えたい	22 (30.1)
絵本作りに参加したい	9 (12.3)
その他	5 (6.8)
手芸で教材作りに参加したい	1 (1.4)

複数回答あり

りやすいものでよかった」というコメントに加え，「(歌詞にからだの知識についての) 具体的内容を盛り込んだ方がよい」「ちょっと難しい」などの意見もあり，また，「DVD 等があれば，健康教育に使用したい」という要望もみられた。

V．考察

1．第7回駅伝シンポジウムで得られた成果

第7回駅伝シンポジウムの開催において，本プロジェクトでは，多くの参加者から，開発した教材の評価を得る機会を得た。アンケート結果から「紙芝居」「歌」「踊り」は概ね評価が高かったが，自由記述で得られた意見要望を参考に，内容を改善する必要がある。参加者に配布した絵本「わたしのからだ」についてのアンケートハガキの返送が待たれる。これらのシンポジウムによって得られたプロジェクトの成果物である教材への評価を踏まえ，さらに，5歳児向けの「自分のからだを知ろう」教育プログラムを洗練させることが，今後の課題として確認された。

また，アンケート回答者が全員，幼少時よりからだの知識を学ぶ必要性があると回答し，本プロジェクトの活動が，市民に受け入れられ必要とされることが確認された。また，終了時の幼稚園保育園関係者の反応から，「自分のからだを知ろう」プログラムの新たな実践場所の確保の可能性を感じ，駅伝シンポジウムによる情報発信の有用性が示された。子どもと共にからだの知識を学ぶ，という普遍的なテーマは，国際的にも通用すると思われ，海外への成果の発信についても今後検討の必要性がある。

2．駅伝シンポジウムの発展過程

2004年度に開催された第1～3回の駅伝シンポジウムでは，その企画運営において，市民との「協働」のあり様が模索された（有森，2005)。2005年度のシンポジウムでは，前年度に模索された「協働」のプロセスを踏まえ，市民主導でのコミュニティの「湧きあがり方」の提示に主眼が置かれた。そして，各シンポジストが経験した医療者と市民の活動の中に，「市民」と「医療者」という二極分化ではない，支援されるものから支援する者，そして支援しあう者へと成長していくなだらかな連合体としての構造が示唆された（江藤，2006)。2006年に開催された本シンポジウムでは，すでにニードが合致し協働が進行しつつあるコミュニティと専門家が，そのプロジェクトの継続性に示唆を得ることを主眼に置き，活動のさらなる発展を目指しシンポジウムを企画開催した。そして，シンポジウムの開催を通し，本プロジェクトの目的である「市民主導型の健康生成のためのからだの知識の普及」が，広く市民に受け入れられたことが，子どもがからだを学ぶことについては，回答者全員（71名）が「賛成」であったというアンケート結果から推察され，さらにコミュニティが拡大する可能性を実感することができた。駅伝シンポジウムで参加者から得られた反応は，本プロジェクトの活動をエンパワーし牽引力となり得るものであった。駅伝シンポジウムにおいて，最初は模索されていた市民との協働は，湧きあがったコミュニティとの協働へと視点を移し，さらに，協働が進行しているコミュニティと専門家が活動のさらなる展開を共に模索するシンポジウムへと発展した。この駅伝シンポジウムの発展は，COE プログラムにおける各プロジェクトの活動の発展と相まって，第1回駅伝シンポジウムから脈々と積み上げられた市民との協働のプロセスの模索によって，成しえられたものであるといえる。コ

ミュニティと専門家との協働が進行しているプロジェクトにおいて，その共通ニードの必要性が社会にとっても同様であると確認された次には，いかにこの活動を継続し発展させていくか，が課題となる。現在，協働しているコミュニティよりさらに拡大したコミュニティと，如何に連携し，活動を行っていくか。その具体的展開方略の作成，本研究における主題である「からだの知識の普及が，市民の保健行動の主体性を上げる」ことの検証・具体的評価方法の開発の推進、市民と協働しているプロジェクトと専門家のみで進行しているプロジェクトが産み出すものの比較，等が，今後の課題として再確認された。

3．駅伝シンポジウムにみる People-centered Care の構成要素

本シンポジウムにおいては，シンポジストの話の中に，〔(生きてきた）経験からの学び〕がみられた。シンポジウムの開催が推進力となり，本プロジェクト内での教材開発が進み〔役立つ健康情報の生成〕が着々と進行した。様々な職種を交えたプロジェクトメンバーによって各々の専門分野での知識を生かして企画されたシンポジウムには，〔異なる視線でのつながり〕が産み出した対象の特徴を踏まえた様々な工夫，子どもが理解することを前提とした〔わかりあう言葉〕によるプログラム構成，がみられ，これまでの駅伝シンポジウムによって見いだされた構成要素が，本シンポジウムにおいても確認された。

本シンポジウムは，特定の疾患や状況をもたないコミュニティを対象としている。このようなコミュニティとの協働においては，今回のシンポジウムで我々が経験したような「コミュニティに潜伏しているニードを，湧きあがらせ（互いに確認し）顕在化させ，活動を専門家との協働へと移行し，発展させる」プロセスを経るであろう。その中の「コミュニティに潜伏しているニードを顕在化させる」段階が特徴的であり，People-centered Care 生成のための要素として，〔互いに確認する過程〕が新たに見いだされたといえよう。そして，特定の疾患や状況をもたないコミュニティを対象としたこのシンポジウムで得られた成果は，今後，広く People-centered Care の定着を目指す本プログラムの発展に示唆を与えるものだと考える。

謝辞：このシンポジウム企画運営に携わりご協力いただいたすべての方々に，この場を借りて深く御礼申し上げます。中央区立月島幼稚園，中央区子育て支援課の皆様には広報活動にひとかたらぬご協力をいただきました。また，日本手芸普及協会キルトリーダーズ東京の皆様には，今回も多大なご協力をいただきました。2004 年に開催された第 1 回駅伝シンポジウムからの継続的なご支援に心から感謝いたします。

引用文献

有森直子，小松浩子，他(2005)．聖路加看護大学21世紀COEプログラム国際駅伝シンポジウム第２報：シンポジウム企画・運営を通して明らかになったPeople-centered Care. 聖路加看護学会誌．9(1). 84-89.

江藤宏美，堀内成子，佐居由美，山崎好美，他(2006)．聖路加看護大学21世紀COEプログラム第５回国際駅伝シンポジウム：知恵と勇気を分かちあう女性たちの経験の中にみるPeople-centered Careの構成概念.聖路加看護学会誌．10(1). 68-74

川上千春，亀井智子，梶井文子，山田艶子，他(2007)．聖路加看護大学21世紀COEプログラム第6回国際駅伝シンポジウム：認知症になっても安心して暮らせる街づくり-市民との協働によるシンポジウムの評価-，聖路加看護大学紀要．33号.

小松浩子，鈴木久美，他(2006)．聖路加看護大学21世紀COEプログラム国際駅伝シンポジウム第3報私たちが選ぶ時代に向けて:患者中心の乳がんチーム医療．聖路加看護学会誌．10(1). 61-67.

小松浩子，太田加代，他(2005)．聖路加看護大学21世紀COEプログラム国際駅伝シンポジウム第１報聖路加看護大学21世紀COE国際駅伝シンポジウムを貫くPeople-centered Careの要素.聖路加看護学会誌．9(1). 76-83.

聖路加看護大学 (2005a)．COE国際駅伝シンポジウム①あなたはどこで最期をむかえたいですか？．ナーシング・トゥデイ．20(1). 58-62.

聖路加看護大学 (2005b)．COE国際駅伝シンポジウム②考えよう！医療と看護あなたも医療チームの一員．ナーシング・トゥデイ．20(2). 59-63.

聖路加看護大学 (2005c)．COE国際駅伝シンポジウム③自分で決めた生き方を実践するために．ナーシング・トゥデイ．20(3). 62-66.

松谷美和子，菱沼典子，佐居由美，中山久子，他(2007)．5歳児向けの「自分のからだを知ろう」健康教育プログラム：消化器系の評価．聖路加看護大学紀要．33号.

菱沼典子，松谷美和子，中山久子，佐居由美，他(2006)．5歳児向けの「自分のからだを知ろう」プログラムの作製－市民主導の健康創りをめざした研究の過程－．聖路加看護大学紀要．32. 51-58.

山田緑(2004)．People-centered Care：概念分析．聖路加看護学会誌．8(1). 22-28.

The Developing Process of People-centered Care in Relay Symposium : The report of St. Luke's College of Nursing 21th Century COE Program 7th International Relay Symposium

"Let's Learn about Our Body with Children!"

Yumi Sakyo, Miwako Matsutani, Yoshimi Yamazaki
Hisako Nakayama, Nobuko Okubo, Akiko Ishimoto
Akiko Mori, Naoko Arimori, Michiko Hishinuma (St. Luke's College of Nursing)
Yasuko Mitsumori, Atsuko Tada, Keiko Indo
(St. Luke's College of Nursing, Graduate School Master Course)
Yoko Setoyama (The University of Tokyo Graduate School of Medicine, Department of Health Sociology)
Junko Muramatsu (Baby in Me)
Atsuko Oyama (episode)
Kyoko Iwanabe (St. Luke's College of Nursing Part-time Lecturer)
Toshiko Imai (Toyo Eiwa Primary School, School Nurse)
Mizue Hara (St. Luke's International Hospital)

The objective of this article is to provide an overview of the St. Luke's College of Nursing 21st Century COE Program 7th International Relay Symposium "Let's Learn about Our Body with Children!" and to consider the components of people-centered care by analyzing and evaluating the process by which the symposium was conducted.

The objective of the symposium was to provide methods through which five-year-old children can learn about the human body and to facilitate the meaningful exchange of opinions with the general public. The symposium was targeted for five-year-old children and their parents, as well as various specialists working with five-year-olds, such as childcare professionals, kindergarten teachers, and nurses and school health nurses.

The symposium was planned and carried out in cooperation with the general public. Each event on the program was kept to within 20 minutes, and a picture story show and song and dance were included in the program to ensure that children did not lose their interest.

Several things were achieved through the process of working cooperatively with the general public in order to conduct the symposium. The elements of people-centered care acquired through past COE activities were confirmed. The staff members experienced the process of "drawing out and exposing (ascertaining them from each other) hidden needs within the community, and shifting activities towards cooperative efforts with specialists and further developing those activities". In addition, a new important element in such activities, "ascertaining things from each other", was uncovered.

The symposium also allowed us to shift the focus of cooperation with the general public, something that we had initially been searching for ways of achieving effectively, towards vibrant and energetic cooperation with the community. Moreover, it was confirmed that the process of cooperation with the general public has continued to develop, moving towards symposiums whereby the community and specialistswork together in search of further progress in their activities. Several future issues were re-identified: the status of further cooperation with the community, and concrete methods for evaluating methods by which five-year-olds can learn about the body.

KEY WORDS: People-centered Care, community, collaboration, development of educational materials, 21st Century COE Program